



MIE CENTER FOR THE ARTS

三重県総合文化センター



第七劇場

ヘッダ・ガーブレル

公演概要書

2017年「人形の家」、2020年「幽霊」。

これまでも、近代演劇の父・巨匠イブセンの作品を製作してきた第七劇場。

2014年に東京から三重に拠点を移して10年目の第七劇場が、

2024年の新作公演として、イブセン「ヘッダ・ガーブレル」を上演。

■ 公演のお問い合わせ

三重県文化会館〔指定管理者：公益財団法人三重県文化振興事業団〕

514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

tel: 059-233-1100（事業課・担当：田島）

■ 作品へのお問い合わせ

合同会社第七劇場

info@dainanagekijo.org <https://dainanagekijo.org>



■ イントロダクション

彼女はなぜ原稿を燃やし、銃の引き金に指をかけたのか——。
自分の生と自己についての実感を求めて、空虚の中で心を圧された女性「ヘッダ」。
生きている価値、妻であることやパートナーの意味や意義、
ひとりの人間として必要な承認をめぐる、生が自己を求める切実さを描く物語。

——人生の目的は何ですか。

思春期には一度は考えるこの疑問に、多くのひとは正確な答えを見つけられないまま歳を取り、大人になって、そして死んでいきます。現代では思春期をとうに過ぎたひとの中にだって、この疑問を抱えたまま悩んでいるひともし少なくないかもしれません。先の質問を少し限定して、あなたの人生の目的は何ですか、としても、結果は然して変わらないでしょう。それでも少し悩んだあと、こう答えるひともしいるかもしれません。

——幸せになること。

この回答には、抽象的ではあるものの、ひとつの正解のような響きを感じられます。ただ、この回答に対して、当然のように次の質問が用意されています。

——幸せとは何ですか。

この質問は、先の疑問よりも少し答えやすいかもしれません。きっと、ひとそれぞれの答えが、多様な幸せが返ってくるはずです。ひとつひとつの幸せを聞くと、こんなに幸せの形があるのかとうれしくなったり、驚くことでしょう。ヘッダ・ガーブレルが初演された約130年前、いや10年前と比べても、その多様さの加速度的な広がりには感覚が追いつかないように思います。

しかしこの望ましい幸せの多様化は、不幸せの多様化と言い換えることができます。価値観の多様な広がりを尊重することは、さまざまな幸せや好きと同様に、さまざまな不幸せと嫌いを尊重することです。幸せのありようが細分化し、最大公約数が加速度的に小さくなっていけば、誰かの快は誰かの不快となることも多くなっていきます。それでは、さまざまな幸せと不幸せを尊重する方法はあるのでしょうか。

この質問への答えも甚だ難しいことは、世界中で、そして身近なところで起きている数々の暴力のことを考えれば痛感します。特効薬的な処方箋はないのかもしれませんが、それでも、寛容や忍耐や忘失の方法が上手になれば、もう少しましになるように、私は感じています。

ヘッダは戯曲の最後、父の形見の銃で自殺します。彼女のお腹の中に宿った命も道連れにして。彼女の行為が、彼女にとっての幸せを求めた結果だったのか、不幸せの結果だったのかも判断が難しいところです。ただ、彼女がほかの誰でもなく、まるで思い通りにならない他人のように感じていた自分自身に行為を向けたことを思えば、彼女が一番許せなかったのは、彼女自身だったように私には感じます。

自分を変えられないのは自分が悪い、周囲に対して行動を起こせないのは甘え、などの声も聞こえてきそうですが、私にはそのように断罪することはできません。將軍だった父の存在、成育環境など、彼女自身で変えられなかった条件の影響も少なくありません。

彼女が手に入れようとした幸せ、抗おうとした不幸せに対して取った行動は、賛否も意見も分かれると思います。しかし、この死に向き合うことは、ヘッダが生きた時代よりもはるかに多様な現代に生きる私たちがそれぞれの幸不幸を承認し合うために有効で、現実的な契機になると、私は感じています。

鳴海康平（第七劇場 代表、演出家）

■ 作品情報

ヘッダ・ガーブレル

原作：ヘンリック・イブセン / 構成・演出・美術：鳴海康平

出演：木母千尋、三浦真樹 / 諏訪七海、桑折 現 / 山形龍平、梨香

舞台監督：北方こだち / 照明プラン：島田雄峰（LST） / 照明操作：前田遥音

音響：平岡希樹（有限会社 現場サイド） / 衣裳：小野花弥

フライヤー撮影：松原豊 / フライヤーレイアウト：橋本デザイン室

アダプテーション：鳴海康平

上演時間：100分（予定）

主催：三重県文化会館〔指定管理者：公益財団法人三重県文化振興事業団〕

共催：レディオキューブFM三重

助成：公益財団法人岡田文化財団

文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業））

独立行政法人日本芸術文化振興会

特別協力：名古屋芸術大学 製作：合同会社 第七劇場

■ 公演情報

会場：三重県文化会館 小ホール（三重県津市一身田上津部田1234）

近鉄名古屋線・JR紀勢本線・伊勢鉄道「津駅」西口より徒歩25分

伊勢自動車道「津IC」より車で10分、「芸濃IC」より車で15分

開演日時：2024年8月31日（土）14:00 / 18:00、9月1日（日）14:00

※各回終演後にトークセッションを実施予定 ※受付開始は開演の45分前、開場は30分前

※9月1日の回は託児サービスあり（要予約・有料）

公演2週間前までに申込（三重県文化会館 Tel. 059-233-1122）

※英字プログラムあり（当日受付にて）

料金：一般前売 2,500円（当日 3,000円）、22歳以下 1,000円（前売・当日とも）

※整理番号付き・日時指定・全席自由 ※未就学児入場不可 ※22歳以下、当日確認要

チケット取り扱い：6月29日（土）10:00発売開始

●三重県文化会館

・チケットカウンター（窓口・電話）

Tel：059-233-1122（10:00～17:00／月曜または月祝翌平日休館）

・WEBチケットサービス「エムズネット」<https://p-ticket.jp/center-mie/>

●第七劇場（予約のみ） <https://dainanagekijo.org>

■ プロフィールなど



ヘンリック・イブセン (1828-1906)

ノルウェー出身の劇作家・詩人。「近代演劇の父」と呼ばれる演劇史上の巨人。シェイクスピア、チャーホフと並び、現在でも世界中で盛んに上演される。19世紀当時一般的だった勸善懲惡の物語や歴史上の偉人が登場する大作から離れ、個人の生活や現実の社会の課題などを題材に戯曲を執筆。

ヘッダ・ガーブレル

1891年、ミュンヘンで初演。研究者の夫テスマンとの関係に息苦しさを感じている妻ヘッダは、退屈な日々と、身近な生気に溢れた人たちに苛立ちを覚える。テスマンの研究者としてのライバルでありヘッダの元恋人レェーヴボルクの死、ヘッダの古い友人テアとテスマンの研究上の意気投合、レェーヴボルクの死に関する判事の思惑が交錯し、嫉妬と羨望と絶望が高まる中でヘッダは、自身の行動で自らを追い込み自殺してしまう。

■ 鳴海康平 (なるみこうへい)

第七劇場、代表・演出家。



Théâtre de Belleville、芸術監督。1979年10月、北海道紋別市生まれ。三重県津市在住。早稲田大学在籍中の1999年に劇団を設立。「風景」によるドラマを舞台作品として構成。国境を越えることができるプロダクションをポリシーに製作し、ストーリーや言語だけに頼らないドラマ性が海外で高く評価される。ポーラ美術振興財団在外研修員（フランス・2012年）として1年間渡仏し活動。帰国後2013年に日仏協働作品『三人姉妹』を新国立劇場にて上演。AAF戯曲賞審査員（愛知県芸術劇場主催 2015～）。名古屋芸術大学芸術学部准教授（2021～）。

■ 第七劇場

1999年、演出家・鳴海康平を中心に設立。主に既成戯曲を上演し、言葉の物語のみに頼らず舞台美術や俳優の身体とともに多層的に作用する空間的なドラマが評価される。国内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内25都市、海外5ヶ国11都市（フランス・ドイツ・ポーランド・韓国・台湾）で作品を上演。代表・鳴海がポーラ美術振興財団在外研修員（フランス・2012年）として1年間滞仏後、2013年に日仏協働作品『三人姉妹』を新国立劇場にて上演。2014年、東京から三重県津市美里町に拠点を移設し、倉庫を改装した新劇場 Théâtre de Bellevilleのレジデントカンパニーとなる。

■ 関連企画

読み会「ヘッダ・ガーブレル」を読みましょう

●日時：2024年8月12日（月・祝）14:00～16:00

●場所：三重県総合文化センター内

お問い合わせ：三重県文化会館 Tel. 059-233-1122

■ 作品へのお問い合わせ

合同会社 第七劇場

5142113 三重県津市美里町三郷2104

mail. info@dainanagekijo.org web. <https://dainanagekijo.org>